

をさせ取りて参り、此趣委細に言上仕りたり。微妙公事之外御讃被成、夫より追々立身被仰付と。左註に云ふ。左近は秀才相兼ねたる生得也といへども、誠忠義臣に非ざるが故に其終りを全くせず。長く子孫を断つに至る。さばかり御恩深き微妙君に敵對し奉るほどの悪人なり。されども、陽廣公の御一言に折れて速に切腹する事、是左近が性といへども本と善にして、本心にかへりたる所なり。いかなる悪人といへども、時として義を感じ、道理に窮する事あるものなれば、大小身ともに人を召仕ふ事には、心得可有之事也といへり。

○左 近 橋

今榮町深美氏の邸跡の向うより、中川氏の邸跡へ行く小路の入口なる溝川の板橋をば、世人左近橋と呼べり。いにしへ稻葉左近の屋敷脇なる故也と云傳へたり。按ずるに、圖書橋の過聞ならんか。

○野村五郎兵衛邸跡

延寶金澤圖に、野村五郎兵衛とあり。元祿六年の土帳に、野村五郎兵衛深見右京向。とあり。按ずるに、寛永十八年

稻葉左近の自盡を命ぜられし後、其の舊邸内を賜はりたるなるべし。

○野村五郎兵衛重猶傳

重猶墓碑記に云ふ。曾祖考。諱重猶。俗字五郎兵衛。産于江州。相傳。野村越中守弟若狭守子也。重猶幼失怙恃。其詳不可得而知也。及長任柴田氏。屬佐久間盛政部下。爲押旗將。高德公討能州荒山賊。盛政援之。使重猶贈所獲首級於高德公。重猶壯健有膽氣。公喜之。賜村正佩刀。柴田氏殲焉。重猶屬高德公。賜食祿五百石。天正文祿之際。常從高德公力戰。公獎其勇功。倍祿爲一千石。擢爲輕卒隊長。豐關白築大坂城。重猶率賀州丁壯。工築敏捷。關白感其勤勞。脫所着羽衣。手自賜之。子孫藏爲家珍。慶長庚子。石田三成作亂。東西分爭。瑞龍公與東照神君。有密議。蠟丸陰符猶恐有漏泄。使重猶行口陳機密。蓋以重猶忠誠不勇。可濟大事也。重猶至。神君大喜。召重猶於臥内。遂定密約。仍賜寶刀鞍馬而還。時三成賊黨充付於江北。越南。重猶用詭計。不爲之阻。行至越前北庄。嚴設新關。不通往來。重猶單騎提槍。呼關門曰。我加賀相公士也。奉使内府。卒事而

還。若欲止之。可自殺以報。可速出檢使。意氣奮發。關吏辟易。北庄城主青木紀伊守。感其忠壯曰。人各爲其主。其可遮殺乎。使人護送出其境矣。瑞龍公善其忠勇。倍加祿食。至二千石。慶長十年瑞龍公讓國於微妙公。十有八年致事薙髮。改號宗順。宗順無子。以婿左馬允重政爲嗣。以食祿一千七百石讓與重政。以三百石爲隱居活計。微妙公謂。三徑之資恐不給焉。使宗順與長屋某相共掌五萬石租稅。且管鷹坊諸吏。此非常渥恩也。寛永元年甲子十一月十七日。病歿于金澤。享年七十三。其嗣重政奉仕。微妙公賞勇功智名有克家之譽。傳至不肖重德。夫自天正至元祿。歷兩甲子。親戚家隸數世五移。試問舊事。多屬烏有。在今不記。後遂湮滅無存者。故錄家譜梗槩。鐫之碑陰。欲後世子孫知我家之興始于曾祖之忠勇。而永久不懈以昌厥後云。元祿七年歲次甲戌冬十一月十七日。不肖曾孫重德百拜謹誌。
小瀬甫庵の太閤記に云ふ。天正十年能州荒山合戦に佐久間盛政が手に討取りたる温井・三宅・般若院・山庄藤兵衛・筒井雅樂助等五人が首をば、野村勘兵衛に持たせ進ぜしかば、野村に村正の刀を賜ふとあり。三州志變叢餘考に、按ずる

に、野村勘兵衛は今の興三兵衛先祖也。此の頃までは佐久間に仕ふるかと自註にいへり。今按ずるに、右は小瀬甫庵の誤にて、五郎兵衛をば勘兵衛と載せたる事いちじるし。さて慶長十七八年の土帳に、馬廻組千九百三十石野村左馬丞と見え、元和二年の土帳に、錢炮頭二千四百三拾石野村左馬助、隱居衆二百石野村宗順とありて、その家祿高墓碑記と符合せず。又野田寺町諏訪神社貞享二年由來書に、中納言利常卿の時、野村宗順・大平右京申上げ、御鷹之爲祈禱當社取建申すとあり。野村宗順・大平右京兩人共其頃の鷹匠頭也。といへり。そのかみ鷹方の惣裁せし事知られけり。

○石屋小路

此の町は榮町深美氏邸跡の横町にて、今は榮町に屬せり。いにしへ名高き石工居たるゆゑに、小路の名に呼び初めたるなるべし。

○龜田權兵衛舊邸

關屋政春古兵談に、龜田權兵衛屋鋪は金森七之助向、唯今佐々木左兵衛屋敷也。と見え、三州志變叢餘考にも、龜田